

『伊地知季安著作史料集』と『旧記題苑』

尾口 義 男

一 平成七年度史料編さん事業と

『伊地知季安著作史料集』

平成七年度、黎明館史料編さん室では『鹿兒島県史料 旧記雑録拾遺 家わけ六』と『鹿兒島県史料 玉里島津家史料五』を刊行し、あわせて八年度刊行分の県史料（『伊地知季安著作史料集 第一巻』・『玉里島津家史料六』）の編集作業を終え、九年度以降分の県史料の原稿作成や底本史料の選定・文書目録の作成など編集準備を進めた。

ところで、いわば平安後期から明治の半ばにいたる鹿兒島県関係の基本的かつ重要にして膨大量に及ぶ公的行政関係文書群の一大編年史料集とでもいうべき『旧記雑録』の編者の一人として有名な伊地知季安は、ほかにも多くの史料集を編纂する一方、徹底した史料の博搜と考証に基づいた著作もまた数多遺している。

本誌前号の「鹿兒島県史料編さん余録2」で指摘したように、これら季安の史料編纂物や著作物の多くは未刊行で、『旧記雑録』と一部の編纂・著作物を除くほかの多くは、未だ鹿兒島県の歴史研究を志す後学に

とって広く一般的に共有され活用される財産とはなり得ていない。そればかりか、そのような季安の貴重な業績が遺されていることすら一般にはあまり知られていない。

『伊地知季安著作史料集』はこのような数多ある未刊の伊地知季安の編纂・著作物の中から、今後の鹿兒島県の前近代史研究の発展に重要な役割を果してくれるものと思われる、すぐれて基本的な史料編纂物や考証著作類を選定して全四巻の鹿兒島県史料として刊行するものである。平成八年度に第一巻を刊行し、以後『旧記雑録拾遺』編の県史料と交互に隔年ごとに刊行されることになっている。

『旧記雑録』関係の県史料の編集・校正業務にあずかる係部門では、前述したように今年度は『伊地知季安著作史料集 第一巻』分の原稿の編集作業を行い、史料編さん委員と顧問の校閲を受けて編集原稿を完成させた。平成八年度刊行予定の『第一巻』は、当初の予定を少し変更して「寛永軍徴」全二十巻のうち巻之一から十三までを収めることになった。ちなみに「寛永軍徴」とは、近世最大の農民反乱事件ともいえる江戸初期の島原の乱に薩摩藩がいかに関わったか、その顛末の始終とともに

に近世の薩摩藩の軍役体制がどのような過程を経て成立したかを明らかにするために、季安が薩摩藩の史料のみならず藩外の幕府や熊本藩などの史料をも広く博搜して著述・編纂した史料集である。

ところで、このような『伊地知季安著作史料集 第一巻』分の編集作業と併行して、芳即正及び五味克夫両顧問の指導のもと平成九年度以降に刊行を予定している県史料の底本史料の吟味・選定、及び編集の方針や具体的方法の策定等、編集準備の作業も進めた。実務面では、係担当の尾口のもと編集・校正の業務には上野みどり・有田緑編集員があまり、伊集院祐子・尾形ひろ子編集員は底本の選定や目録作成など編集準備の業務にあずかって円滑な事業の進展に精力的に尽力してくれた。

『旧記雑録』関係県史料の編纂に関わる上記の五名の職員は、現在の業務と直接的に関わって「寛永軍徴」以外の季安の数多の編纂・著作物についても個々に深く接触する機会が非常に多い。それらの中で今年度特に我々の注目を引いた著作物の一つに「旧記題苑」がある。

二、伊地知季安と「旧記題苑」

当館所蔵の影写本史料中に「旧記題苑」と表題を付された二種の写本史料がある。一つは東京大学史料編纂所所蔵の鳥津家文書中から収集し（以下、東大本）、もう一つは神奈川県松方峰雄氏の所蔵文書から収集したものである（以下、松方本）。

この史料の著者は、序文に一方は「平季彬」（東大本）とあり、もう一つは「伊地知小十郎平季彬」（松方本）とあることから伊地知季安で

あることを確認できる。ちなみに小十郎は、季安が初めて仕官した二十歳以降用いた通称^①であり、季彬は、季安が二十歳のとき生家の伊勢家から伊地知家に婿養子に入って家を継いだ際に旧名を改め用いた名^②で、以後文政五・六年頃に季安と改めるまでの約二十年間にわたって用いた名である。成立年代は、同じく序文に「文化丙子仲春ノ晦夜、城北馬背岡ノ潜隠舎ニ筆ヲ把ル」（松方本）とあるところから、季安がこれを著した時期は文化丙子の年、すなわち文化十三年（一八一六）のこと、彼が三十五歳を迎えた時のことであつたことが理解される（潜隠とは、彼が遠島配流中に用いた始めた自分の別号である^④）。

内容は、東大本と松方本を照合してみるとほぼ同じといえるが、完全な同一物ではない。すなわち、文章の表記の仕方や記載形式が異なり、特定の箇所本文記事を一方は載せているのに他方は欠落させているなどの箇所が互いに見受けられる。特に序文は東大本が完全な漢文体で表記されているのに対し、松方本はカタカナ送仮名付きの読み下し表記となっている。したがって両書の写本はそれぞれ異なる史料に拠って成立していることがわかる。内容を若干異にする「旧記題苑」の題名を冠した二種の史料集が季安によつてもともと作られて存在していたのか、或いは後世の写本の繰り返しの過程でこのような違いを生ぜしめることになったものか、現時点の筆者には明らかにできない。

具体的な記載内容は、序文の「予古書ヲ好ノ僻アリテ日頃群籍ヲ涉獵シ、親敷睹及ヒタルモノ、或ハ唯石渠ノ秘書トヤラニテ外題ノミ聞及ベルナト、問歳興ニ触レ、筆ニ隨イ、先後ヲ分タス、雅俗ヲ辨セス、漫ニ書ツラネ侍リシニ、覚ス一冊子ト成ス」（松方本）という記事と本文中

の記事を合わせれば明らかである。

これらを見るに、「旧記題苑」は、かねて薩摩藩の古書や旧記類に親しんで多くの書籍を広く精力的に読みあさったり収集したりしていた季安が（「予古書ヲ好ノ僻アリテ群籍ヲ涉獵シ」）、文化十三年段階で把握していた薩摩藩史研究の基本的な史料となる諸旧記類や日記類、及び系図や文書類などの書名等の題名を、軍役関係書や軍記類・日曆・寺社縁起・雅藻等の五項目に分類して書き上げたもので、いわば季安が作成した当時における薩摩藩史研究のための基本的な書籍や文書史料類についての目録集といえる。これに列挙された書名は四三一冊を数える。

ところで、この「旧記題苑」が著された文化十三年という時期は季安にとつていかなる意味をもつ時代であったのであろうか。すなわち季安がどのような境涯におかれていた時期であったのであろうか。また、このような著作の成立に当時の季安のどのような心情や生きざまを見てとることができるであろうか。以下、少し覗いてみたい。

季安が送った生涯については、このあとの第三節で要約的にまとめて紹介するが、本節に必要な範囲でその一部を抜き出して示すと、彼が三十五歳となった文化十三年という年は、その八年前の文化五年（一八〇八）に起こった文化朋党崩とよばれる政変に彼が連座して、三年間の喜界島遠島処分を受けてのち赦されて鹿児島にかえってきたものの、さらに五年間の自宅閉門が命じられてひたすら努めてきた謹慎生活がようやく許され外界との往来が自由となった年である。しかしながら閉居謹慎の生活は許されたとはいえ、官への仕途は許されず依然として不遇・逆境の生活を続けることを余儀なくされていた時期であった（季安の官へ

の仕途の禁は、その後弘化四年まで、延べにして約四十年間続いた）。

にもかかわらず、渡辺盛衛によると、この時期は、そのような境涯のもと季安が取えて本格的な薩摩藩史研究を欲起して藩内の各種文書や旧記類など史料の収集に精力的に着手した頃と推定されている時期でもある。

「旧記題苑」は、このような不遇・逆境下の困難な学究生活を取えて承知の上で、季安が薩摩藩の在野の一史家としての一生を固く決意し歴史家への道をひたすらに歩み始めた草創の時期の著作といえる。

以上のことを念頭に入れ、「旧記題苑」に書き上げられた四三〇を越す各種書籍や文書史料の題名の数々を目の当たりにするとき、逆境にも拘らずこれからの薩摩藩史研究にむけて、燃えたぎるような沸沸たる情熱を内に秘めて、これからの一生を在野の歴史家として精力的に生きることを決意して学究活動にとりこんでいた当時の季安のすさまじいまでの気魄や猛烈なる意欲の一端が垣間見えてくるように思われる。

本節では季安の生涯について詳しく触れることができないので、次節で、本節を補う目的を兼ねて、季安の送った生涯を要約的に紹介することとしたい。また「旧記題苑」に書き上げられている四三〇余の書籍や文書史料等の題名とそれぞれに付記された記事の内容についても末尾に参考として表で掲げることにした。

三、【参考】伊地知季安の生涯と「旧記雑録」

幕末の薩摩藩の歴史家伊地知季安の事績や人となり・生涯等については、古くは渡辺盛衛の『伊地知季安先生事蹟』（昭和九年、薩摩藩史研究

会編)によって詳しく知ることができる。そして近年では顧問の五味克夫先生によって、『鹿児島県史料』の編さん事業が始まってからこのかた県史料の解題や月報ほか多くのご論考においてさまざま形で紹介してきていただいている。

ところで、この伊地知季安が「旧記雑録」という日本的にみても極めて価値の高い薩摩藩の一大編年史料集の編纂著作者であるということについては誰もよく知っていても、彼の送った学究一途の情熱的な生涯や「旧記雑録」以外の数多の事績等については一般には案外と知られていない。以下、事績については措き、折角の機会を利用して季安の辿った生涯を渡辺盛衛の『伊地知季安先生事蹟』に基づいて大まかに紹介することとしたい。

季安は天明二年(一七八二)鹿児島城下石川の伊勢八之進の次男として生まれた。寛政二年(一七九〇)、九才にして元服し、従兄本田親孚(後に記録奉行)が烏帽子親として加冠した。

享和元年(一八〇一)、二十歳のとき伊地知家に婿養子として入り、先に死去していた伊地知季伴の跡を継いだ。渡辺盛衛によると、この頃十代の少年期から記録所見習として記録所に出仕し、従兄で記録奉行の本田親孚の指導誘掖を受けて旧史に親しんでいたことが推察されている。翌年作事下目付に任官され、次いで三年横目助に進んだ。

季安が二十七才となった文化五年(一八〇八)、薩摩藩主島津齊宣の意を受けて、疲弊窮乏した藩財政の建て直しと廢頹した土風の一大刷新を目的に、家老樺山久言や秩父季保らが主導して、前代の施政を根本的に改めて薩摩藩政の大改革を急進・過激的に断行しようとしたことが、

前藩主で將軍岳父でもあった島津重豪の激怒を買い、樺山・秩父ら改革派の首謀と見られた十三名が切腹させられたのをはじめ、遠島・寺入・逼塞・役免など合わせて百余名の藩士が連累者として嚴罰を蒙り、藩主齊宣は引退させられることになった文化朋党崩(近思録崩・秩父崩)という事件が起こった。

改革派の主謀者の一人秩父季保の家と嫡庶の間柄の関係にあることから総本家の家筋にあたる秩父家によく出入りし、しかも改革派の藩士たちに大きな影響を与えていた儒学者木藤武清の門にもよく出入りして講義にも出席していたことが推測されている伊地知季安は、この薩摩藩の文化五年の一大政変において、藩当局によって事件に関わりの深い人物の一人としてみられて厳しく処罰されることとなり、翌六年、喜界島に遠島されることになった。

三年間の配流ののち赦され、文化九年に季安は鹿児島に帰ったが(三十一歳)、その後もなお閉居謹慎を命ぜられた。四年後の同十三年にこの閉門は解かれたが(三十五歳)、なお彼が藩の役人に就くことは許されず、それは、その後の彼の藩史局を相手とした憚りのない学究姿勢にも災いされて、弘化四年(一八四七)六十六歳になるまで続いた。

二十代の後半に遭遇した薩摩藩の政変を機に訪れた、遠島から鹿児島に帰ってのちの極めて長期の閉居謹慎・禁錮といった不遇と逆境の中にあって、季安はその精力と情熱を古文書や旧記類の史料収集と薩摩藩の史実考証のためにひたすらに振り込み、精励した。

約四十年間に及ぶ不遇の時代に彼がひたすらに没頭した史料索搜と薩摩史の探究は、やがて当時一流の学者や藩枢要の部局にある見識ある政

治家たちをして高く評価せしめるような多くの著作論考や大部の史料編纂物として結実していくことになった。天保年間に稿成って江戸の大儒学者佐藤一斉（昌平黌儒官）に寄示して驚嘆させた「漢学起源」、及び同じ頃に成立して弘化年間の薩摩藩軍制改革の際の重要な参考資料となつて活用され、当時藩の要人の一人であつて藩政指導者調所広郷の腹心でもあつた海老原清熙に激賞された「寛永軍徴」、そして弘化の琉球外艦事件の対応に帰国した島津斉彬（当時世子、のち薩摩藩藩主）を一読させて感嘆させた「管規愚考」（のち「島津御荘考」と改む）等は、その代表的なものといえる。

仕官の禁が解かれた弘化四年、季安は早速登用されて徒目付となり、次いで軍役方掛に命じられ、明けて嘉永元年（一八四八）には記録方添役に昇進し、あわせて薬園奉行勤・軍役方取調掛を命じられた（六十七歳）。それから四年経って齢七十一歳となつた嘉永五年（一八五二）、季安の人となりを見出していた新藩主島津斉彬によつて記録奉行を命じられ、その天賦の才と飽くことなき情熱を縦横に發揮し活躍できる地位と環境が与えられた。それ以降老いて益々榮進するも情熱はいささかも衰えることなく、古文書の収集や藩祖忠久以来の貴重な島津家文書の整理・保存に精力的に努める一方、島津家の家譜編纂や歴史考証にも尽力した。そして慶応三年（一八六七）役高百四十石奥掛用人格に榮達し、その夏、齢八十六歳の生涯を閉じたのである。

一生を薩摩藩の史料収集と編纂・整理、及び歴史考証に捧げた季安の数多の功績の中でも最大のものが、息子の季通と親子二代にかけて編纂を続け完成させた「旧記雑録」である。「旧記雑録」は、島津氏の治政

を中心とした南九州地域の歴史や社会の変遷や発展を究明し窺うに貴重にしてもっとも基本的とでもいふべき文書や記録類を、季安と季通があらゆる旧記・文献類から抄出したり、藩史局ほか藩内各地の旧家・名家や寺社などから収集したりして時代順に配列して編纂した、平安後期から明治の半ばに至る一大編年史料集である。

渡辺盛衛によると、季安が後世の「旧記雑録」に集成される文書・記録類の収集に着手したのは、文化の政変に連座した遠島から赦されて帰ってきて禁錮生活にはいった三十代半ばの頃ではないかと推定されているが、それから齢八十六歳の逝去に至るまでの約五十年間、季安は新しい史料を収集すると、それを逐一追加挿入していつて漸次薩摩藩の大宝藏史料集に集成していったのである。季安亡き後、この事業にかけた彼の志は子の季通に受け継がれて明治三十年頃まで増補編纂の作業は続けられたという。

こうして成立した歴大量の一大編年史料集が今日東京大学史料編纂所蔵の島津家文書中に残る「旧記雑録」三六二卷（前編四八卷・後編一〇二卷・追録一八二卷・付録三〇卷）である。そして、これを約二十年の歳月をかけて解説・編集し、準備整ったものから順次翻刻して世に紹介したものが昭和四十五年（一九七二）から六十二年（一九八七）にかけて本県が刊行した『鹿児島県史料 旧記雑録』全十七卷である。

注

(1) 渡辺盛衛『伊地知季安先生事蹟』（薩摩史研究会 七二頁）。

(2) 前掲同、七二頁。

(3) 前掲同、七六頁。

(4) 前掲同、七四頁。

(5) 前掲同、五頁。

(6) この節における季安の生涯についての筆者の執筆は、『伊地知季安先生事蹟』に拠っている。同書二二二六頁、七〇―七七頁を参照されたい。

「日記題苑」列挙の史料名

A. 軍役関係諸帳並びに軍書類の部 (※この項目、両本とも欠落により筆者が立てる)

注、本表は主に松方本「日記題苑」に拠って作成したが、東大本とも照合して、一部は校訂し補った。

	史料名	著者・史料の内容・異称など
1	薩隅日図田帳	建久8年の図田帳(建久図田帳)
2	船法定	坊津飯田備前守が鎌倉に召され、土佐篠原孫右衛門・兵庫辻村新兵衛と議定した船法三十一か条。
3	御家人交名注文	京都足利將軍の昵近衆の名書。交名注進ともあり。
4	内裏大番触状	
5	鎮西引付	將軍昵近の家々の御番賦とみえる。
6	忠昌公御代頃御次第書	凡そ五十九か条。元旦から年中御式・御祝事等の頭書とみえる。末に田島駿河守・伊地地長門守など。
7	忠昌公御座体書	
8	水俣御陣人数賦	天正8年、貫明公(島津義久)が肥後の相良義陽を攻伐した時の人数賦。肥後入次第人数帳とも題す。
9	貴久公御譜代衆	伊作以来奉仕の家臣について次第不同に載す。慶長5年正月の鯨島古船齋(島津日新家臣)覚書。
10	飯野衆中帳	天正17年頃、真幸院にて松齡公(島津義弘)に奉仕した人々が多く見える。
11	飯野御軍談人衆	天正8~15年頃迄、諸外城から武事練達の士を折々召され談合あった人々。およそ54人見える。
12	高麗御本陣御番帳	馬関田士宇都原右衛門家蔵。
13	出水移衆中帳	慶長3年、朝鮮の功で松齡公(島津義弘)が高城・出水拝領後、本田親正以下召し移されし人々。
14	国分御番星合帳	貫明公(島津義久)直衛の人々。小番大番の格式始まるか。国分士平田治右衛門家蔵。
15	加治木御案文留	松齡公(島津義弘)の時、彼是往復の書簡冊。
16	国分御代諸士高帳	
17	国分衆中帳	慶長19年の帳。
18	従国分移衆中帳	慶長16年、貫明公(島津義久)逝去の後、鹿児島へ召移された諸士の姓名田録。
19	慶長十八年鹿児島衆中高帳	慈眼公(島津家久)の治世、鹿児島府下の諸士の姓名田録。但し主に地頭にあった者は漏れるという。
20	在大坂人数賦	慶長19年、神祖(徳川家康)の徴に応じて慈眼公(島津家久)が中途まで出陣した時の従軍衆の賦。
21	元和初年諸士高帳	
22	元和六年諸士高帳	
23	元和七年加治木高帳	
24	御参内御供人衆	元和3年6月、大猷公(徳川家光)参内の時、京師の慈眼公(家久)に供奉の諸士賦帳。肥後平蔵家蔵。
25	寛永九年御人数賦	肥後の加藤忠弘改易の時、慈眼公(家久)袖判仰出。3月19日、所定の地頭以上、騎馬の賦。
26	寛永九年諸士高帳	
27	寛永十三年諸士屋敷帳	
28	寛永十五年島原軍衆賦	
29	評定所御案文帳	
30	村田氏島原人数帳	
31	有馬原之城高名窮帳	田布施二宮氏家蔵。
32	同年加治木御扶持帳	
33	加治木衆中帳	寛永10年10月、慈眼公(家久)から島津兵庫忠朗へ召付られた諸士姓名・持留知行の帳。
34	加治木東衆中帳	寛永11年の帳。島津忠朗へ召付られたという。
35	御引付留	支配方所蔵。元和5年までと寛永以来当時までの時々の引付。
36	伊勢貞昌御異見状	
37	寛永十七年御人数賦	
38	寛永二十一年諸士屋敷帳	支配方所蔵。これ以来屋敷改めごとに改作された屋敷帳、当時まで数十冊。
39	万治二年諸士高帳	
40	鹿児島島古絵図	支配方等に所蔵。慶安3年以来時々改正の絵図。元禄の絵図は目付役所にも所蔵。
41	代々小番帳	寛永3年、代々小番の格式を設けた時の姓名という。
42	先君遺命令	
43	先君遺簡	

44	国家古鑑	
45	島原在陣案文留	喜入摂津守忠政の書留置くものなり。
46	田賦帳	川島新右衛門重貯の著。
47	諸士高系図	高所所蔵。元禄3年改帳を四番とし享和2年改帳まで十八番。数十冊。継目家督・御目見名替等の事。
48	諸士組帳	六番十組の組分をもって記し、継目家督・御目見・名替等の事。
49	諸郷地頭系図	支配方等所蔵。中古以来の地頭。上代多く漏れたりとぞ。
50	御奉公帳	国分諸士の奉公帳。
51	慶安高辻帳	
52	貞享高辻帳	
53	米直成帳	慈眼公（島津家久）の時代から年々の米価の貴賤を記す。加治木物奉行所所蔵。
54	家例要覧	
55	酒匂安国寺申状	酒匂次郎、のち右馬入道。薩摩安国寺住持。惣翁公（島津元久）家老。酒匂一枚紙、御当家六巻書とも。
56	山田聖栄自記	名は忠尚。出羽守と称す。聖栄は老号。文明14年、80歳の著書。一名、六巻書、七巻双紙とも。
57	応永記	
58	文明記	天文24年4月成立。忠昌記ともいう。文明25年10月～26年7月24日迄の記録。
59	文明中行脚僧雑録	この年8月行脚して聞いた歴々を記せしもの。 ※元禄の初め、知覧の古寺から河野郷左衛門が見出す。
60	御世始記	島津忠昌即位の事を記す。
61	西牟田三河守自記	文明14～18年10月の自記。新納是久・忠祐戦死・墓所等の事のみ詳らかに記す。
62	貴久記	大永6年初秋～天文24年4月2日の帖佐本城・新城・山田城落去の事までの軍乱を記す。
63	樺山玄佐自記	天正5年5月18日、樺山安芸守善久60歳にて書き著す。大永年中～天正4年までの事を記す。
64	伊集院孤舟物語記	孤舟は伊集院大和守忠朗の老称。
65	箕輪伊賀自記	箕輪記ともいう。名は重澄、初めは舎人と称す。
66	翰游集	慶長7～8年頃、長谷場越前守宗純入道の著す軍記。長谷場越前自記、薩陽軍記とも題す。
67	勝部兵右衛門聞書	勝目甚兵右衛門入道荷翁の編集ともいう。天正6年耳川の役～16年夏の事までを記す。
68	天正四年旧記	加治木日野氏家蔵。
69	新納忠元弓箭覚	
70	新納忠元軍勞之覚	正保2年4月24日、新納加賀守忠清（忠元の孫）が記聞し進献した書。
71	伊集院玄葉弓箭覚	
72	惟新公御自記	慶長7年4月、関ヶ原の役の始末の和議最中に書き記したもの。
73	町田存松覚書	
74	帖佐宗辰覚書	自記。
75	新納慶雲覚書	
76	樺山紹劔自記	
77	濱田栄林覚書	
78	新納遊雨書留	
79	宥田将監古物語	
80	鹿屋兼長自記	名は初め三左衛門、のち老岐守。川上忠堅戦死の事どもがみえる。
81	後醍醐院宗重覚書	
82	佐多民部左衛門久英覚書	明暦3年3月、知覧より鹿府へ召されたときの自記。時に久英80歳。
83	瀧辺領右衛門覚書	万治年中に命を奉じて記述し史館に呈したもの。時に80歳。朝鮮軍記とも題す。名は元直。
84	伊地知大膳夢物語	名は朝直。武功多し。元和8年、81歳で死。子太郎兵衛（琉球横目）が老年に彼国から贈りきた覚書。
85	池田六左衛門奉公状	名は貞秀。子の右近将監の記聞するもの。
86	赤塚源太左衛門覚書	自身従軍奉公した戦い（弓箭）の簡条略記。正月27日に書き記すも成立年未詳。
87	右松安右衛門覚書	
88	朝鮮軍記	川上久国自身の従軍見聞記。

89	玄宅覚書	玄宅は出水士。朝鮮に従軍し、寛文4年に成立。
90	友野甲斐入道申状	
91	益山八右衛門覚書	
92	酒川御打立覚書	加治木福永筑後守家に伝わる。慶長3年11月15日よりの覚書か。
93	菱刈休兵衛覚書	
94	大重平六覚書	
95	神戸久五郎覚書	五兵衛覚書とも題す。五兵衛咄を野村勘兵衛盛豊が聞書したのもあり。
96	押川強兵衛奉公覚	名は公近。子の市之丞記す。
97	酒川陣鎧毛色付	川上久国が島津久道の求めに応じて記し贈ったもの。
98	奥関介覚書	
99	井上主膳覚書	明暦3年に記す。阿多長寿院盛淳に従って軍行した関ヶ原の役の覚書。
100	吉田玉林坊覚書	
101	桐野掃部介覚書	掃部介自身の覚書に養孫軍助の書出を付す。
102	黒木左近兵衛申分	関ヶ原の役の記事。左近兵衛の初号太郎次郎。初め福山士、のち出水に移る。
103	平山九郎左衛門申分	関ヶ原の役の記事。命に応じて呈上。
104	伊東峯岐入道申分	命に応じて記した朝鮮の役従軍の記。
105	晏斎覚書	晏斎は山田民部少輔有栄入道。
106	山田弥左衛門奉公状	弥右衛門は山田晏斎付衆中で出水の士。
107	曾木弥次郎覚書	
108	長野勘左衛門覚書	
109	横山弓内奉公覚書	弓内の自記。関ヶ原の役の覚書。
110	伊丹孫兵衛覚書	
111	黒木播磨覚書	
112	永禄以来覚書	須木の士、名は忠則。庄内の役(村尾笑栖に属す)等に従軍した時の自記。(東大本は上野隼人覚書。)
113	川上久国談話	河野通古より記聞した書。
114	川上久国申状	
115	築地三右衛門嘶覚	
116	長友治郎左衛門聞書	耳川の役を記す。
117	朝鮮覚書	帖佐白坂家に伝わるを聞いたもの。
118	谷口宮内左衛門書留	承応元年5月24日成立。元龜年中の肝属の乱の事より元和元年大坂落城までの略記。
119	坂元織部覚書	
120	大村市兵衛自記	名は重頼、加治木士。承応元年に記聞の年代記。古戦書付と題する書付の内に天正年中の外城地頭記あり。
121	阿蘇卜(曇)斎玄與由緒。	
122	野元源左衛門戦死記	兄玉源吾源左衛門の覚書。
123	島原立覚	寛永15年3月に田代衆の記したもの。
124	伊勢貞昌奉公状	
125	伊勢貞昌与相良氏状	
126	伊勢兵庫貞衛与貞顕状	
127	東郷重位立合書	
128	重位弟子立合書	
129	東郷重尚名矢記	日高三左衛門の記聞するもの。
130	高崎四郎右衛門聞書	
131	伊東新助敵討	元文3年、家僕六右衛門の記憶を傍書したもの。この時の名は権平。
132	南刑部左衛門敵討首尾	南刑部左衛門は出水の士。地頭仮屋所藏。
133	加藤清風始終覚	門人坂本廉四郎清東の記聞するもの。

134	坂本清東立合書	
135	琉球教条	
136	園田成芳覚書	
137	内田仲左衛門政寿自記	
138	佐土原松木党敗之記	
139	無人島漂流聞書	志布志之人。
140	新納旅庵奉公状	
141	本田助之丞親貞奉公状	
142	本田笑閑奉公状	
143	山田家由緒	
144	中馬大藏奉公状	
145	有馬丹後奉公状	名は純定。国分士。寛永9年大島代官に選ばれ勤功多し。元禄10年8月、子八ヶ代五左衛門の覚書す。
146	大島家由緒	
147	山口氏由緒	
148	東郷氏由緒	

B. 日曆之部

	史料名	著者・史料の内容・異称など
149	犬追物手組	宝徳3年から延宝6年まで。1冊。
150	福昌寺年代記	
151	年代記	桜島土池田新兵衛家蔵。
152	三島本覚坊日記	天文23年9月12日の島津貴久・義久の岩越出陣の事から10月19日迄の日記。貴久記に続べし。
153	山本氏古日記	蒲生士。弘治元年2月より3年6月までの日記。磨滅し読めぬ所多し。貴久記に続いて読むべき日記。
154	伊地知駿河守御年男日記	天正11年12月25日より翌年正月15日までの御式の目録。駿河の名は重則。この時右京亮。
155	樺山玄佐日記	元亀3年9月26日早崎御陣の事。
156	上井覚兼日記	天正2年8月1日より12月晦日迄。3年元日より4月24日迄。11月朔日より12月27日迄。4年8月16日より9月6日迄。10年11月朔日より12月晦日迄。11年正月元日より11月晦日迄。12年元日より大晦日迄。13年元日より12月26日迄。14年元日より10月15日迄の事を記す。14冊。使寮から老中の時。天正5年より9年迄の5ヶ年分は欠く。
157	中務家久上京日記	自筆の日記。本城源太郎家現存。「古見の御手跡すぐれて見事なり」とあり。
158	耳川合戦日記	川上左近将監久辰の記。
159	御年男日記	正本は御納戸にありと。天正10年元日より15年迄の伊地知又八・本田又二郎勤める時の御式の記。
160	本田大炊太夫年男日記	
161	日知屋陣日記	
162	伊地知勘解由左衛門御年男日記	
163	家村源左衛門日記	天正15年6月、龍伯公（島津義久）始めての上洛に供奉の士なり。
164	山口伊賀守自記	天正15年、太閤（豊臣秀吉）征西のとき、平佐城に城守して記するもの。
165	新納忠増軍行日記	弥太右衛門。忠元子。文禄元年3月の松齡公（島津義弘）の朝鮮出陣に御供。門出～7月22日の日記。
166	堀内日限坊廻国日記	
167	大口諏訪祭日記	元亀年間～当時迄の諏訪祭頭屋日記（新納忠元発起）。大口に伝わり、一町衆以上者を年々頭屋に定む。
168	面高俊昌軍旅日記	連長坊と称す。慶長2年7月唐島の瀬戸より奥入御供の日記。
169	新納忠元上洛日記	
170	大島忠泰軍行日記	
171	阿蘇玄與日記	
172	新納旅庵日記	覚書。
173	松岳和尚日記	松岳は加治木吉祥寺の開山。

174	伊地知勝左衛門日記	
175	加治木御日帳	通古云わく、惟新公（島津義弘）御隠居方日記なり。加治木日野家に納め置く。今国史□に格護。
176	高麗入御日帳	
177	川島新右衛門日記	
178	高麗日記	帖佐有田新左衛門家蔵。
179	養毛氏日記	出羽守か。
180	山田昌巖日記	
181	伊集院幸侃上洛日記	
182	川上久国上使付日記	
183	新納證印日記	名は仲雄、権左衛門と称す。御使役にて加治木公子に給事せし時の日記。
184	島津久通日記	
185	中務久茂日記	
186	阿多忠朗日記	六郎右衛門と称す。年代記。
187	竹内助市日記	名は益祐。泰泰公（島津綱久）に近侍。寛永19年より寛文・延宝の間の日記。
188	延久公御長久記	綱久公御年若之内方覚日記とも題す。
189	野村盛豊日記	勘兵衛と称す。
190	伊勢十兵衛日記	江戸留守居の時、赤松甚右衛門と記す。
191	横山長古日記	蔵之丞日記ともいう。
192	伊地知増也日記	権左衛門重視の日記。
193	大山源兵衛日記	覚書ともあり。
194	平田可竹日記	
195	木村静隠上京日記	
196	徳田太兵衛日記	

C. 家譜・系図・由緒類の部 （※この項目、両本とも欠落により筆者立てる）

	史料名	著者・史料の内容・異称など
197	御当家由来	少将忠恒公（島津家久）の時の記。御支族の事まで付録。
198	御家譜	300冊。命を奉じて平田清右衛門純正編集。史館、代々継編す。
199	島津伝記大概	貞享年中、史館に於て撰す。
200	御高恩記	全。
201	関ヶ原之儀御書出	全。
202	家光公桜田御成之記	寛永7年、伊勢貞昌の撰。
203	島原余燼録	史館にありと。
204	王子村犬追物御覧之記。	弘文院林春斎の著。
205	関ヶ原記	
206	新撰系譜	寛文9年春、綱貴命で大田久知・河野通古撰。凡そ24家。此書元禄九年御城火事消失ス今絶望可惜也。
207	諸家大概記	河野通古撰。
208	頼朝公御教書句解	命を奉じて田中五右衛門国明の注解。3年にして成る。林大学頭の跋あり。
209	征韓録	6巻。命を奉じて島津久通の撰。林大学頭の序あり。
210	島津世録記	8巻。島津久通の撰。林大学頭の訂正。
211	三国擾乱記	宮之城家士土持新右衛門仙岩の著。
212	古城主由来記	全（宮之城家士土持新右衛門仙岩の著）。
213	御重物由緒書	
214	御代々御判鑑	
215	日新菩薩記	慶長2年、常潤院住職泰園著。泰園、諸州遍歴し永禄10年帰国、日新公の命により常潤院住職となる

216	御防戦之記	菱刈賊討伐の記。
217	祇答院記	土持仙岩の著。
218	御居城御戦場記	史官の著。
219	古城古戦場記	全(史官の著)。
220	廟堂要覽	全(史官の著)。
221	地志要略 上・下	上下二巻。公義目付來国によって、宝暦6年9月、大史吉田清純・本田親方・山田有雄ら撰す。
222	関ヶ原御陣始終大概記	史官町田俊雄の撰。
223	御系図	
224	宝永雜録	萬代記の事か。
225	鳥津世家	命を奉じ史官郡山遊志の撰。
226	鳥津国史	山本正誼撰。凡そ32冊。別に国史編集問合留あり。
227	西藩野史	得能通昭の撰。
228	惟新公御家督考書	史官の考。 (※東大本には妙円公御督考とあり。)
229	鳥津御勲功記	
230	薩藩名勝志	太史本田親孚編。巡三州写其勝景所撰ナリ。凡そ19冊。
231	御治世要覽	清水盛香撰。 (※東大本には清水盛富とあり。)
232	御上下記	光久公、寛永15年正月暇江戸発駕、2月登城云々～宝暦4年5月重年公鹿兒島出立、7月登府迄の記。
233	御家老記	(※東大本「上代守護代或物奉行又乙名老役老中杯ト見ユ」。)
234	御使役記	御用人記ともいう。
235	大目付記	横目頭ともいう。
236	寺社奉行記	
237	御勘定奉行記	
238	御兵具奉行記	
239	琉球在番系図	
240	高奉行系図	
241	物奉行系図	
242	御記録奉行系図	
243	御右筆記	
244	中山王系図	
245	琉球国出緒	
246	大島私考	本田孫九郎親孚、文化2年11月、大島代官たるとき著す。凡そ3冊。
247	琉球征伐記	
248	喜界島大官記	
249	喜界島略志	長崎龍蔵方義の著。
250	鳥津支流系図	
251	寄合以上他家系図	
252	薩隅諸家系図	3巻。元禄～宝永の間、猿渡信安御用人にて記録奉行より諸調書を取次せし時の抜書、又は自分問合書等。
253	秩父本田調書	伊地知助右衛門重英が史官の時に上疏せし1冊。世に家争の書という。
254	諸家系図抜書	日高六右衛門抜書。凡そ410家。
255	東郷氏年代記	
256	三国軍記	
257	荘内軍記	古本1冊、増補2冊。
258	荘内平治記	
259	荘内古跡記	
260	天誅録	

261	伊作由来記	
262	阿久根由来記	太史平山武毅の著。
263	樋脇由来記	
264	山之口古今記録	
265	長島由緒	
266	栗野由来記	
267	志布志華篋	志布志士阿多源太夫の著。
268	加治木放老物語	
269	飯野物語	
270	国分新城繩張記	
271	晴養記 (晴養生害記)	
272	南浦軍記	
273	大島海路記	代官本田親孚の著。
274	大島要文櫛栞集	全15冊。
275	屋久島記	屋久島奉行馬場伝兵衛の著。
276	稲津乱記	
277	木崎原軍記	伊東一空の撰。
278	木崎原軍記参考	向井達次の撰。
279	御歴代	入佐即道の著。
280	北原落城記	偽妄多し。
281	島原怪闘志	入佐即道の著。
282	適意集	市来源右衛門家年の著という。
283	盛香集	清水次右衛門の著。
284	通昭録	得能佐兵次の著。
285	通昭雑録	得能佐兵次の著。
286	静庵雑録	
287	称名墓志	本田親孚の撰。
288	藩翰譜島津伝記弁誤	本田親孚の撰。
289	名臣小伝	本田親孚の撰。
290	古蹟癖	鮫島伝蔵の撰。
291	本藩地理拾遺集	田尻小吉種市の撰。
292	三国地志考	
293	賤之男手巻	白尾斎蔵国柱の著。
294	薩陽落穂集	明和8年、伊集院弥八郎兼喜の著。
295	新古談話	新納忠村の著。
296	浦之波	木村質右衛門時規の聞書 (探元の子)。
297	旧伝集	古咄集ともいう。宮内某編集。別に宮内喜兵衛覚書と題するもあり。
298	類事苑	3冊。入佐一三次郎即道の著。
299	宇宙記	平田治右衛門純庸の著。平田純庸自記と題せし書と同書か。
300	諸捨集	有馬源兵衛の著。
301	征韓略志	3冊。入佐即道の著。
302	征莊略志	2冊。入佐即道の著。
303	徳田太兵衛当話物語	
304	老圃農談	祿寝丹波、博く老農に問わせ、凶年等の備えになる事どもを記させ置しもの。
305	泰平寺縁起	寛正4年6月19日、住僧教源の著。

306	靈山寺弥陀建立縁起	承久2年8月、申木野三郎平忠道の著という。申木野頂峯院にあり。
307	靈山寺寄進状	申木野三郎平忠道の寄進せし状。申木野頂峯院にあり。
308	三國名勝図絵	島津齊興の命を奉じて橋口今彦兼古・五代直左衛門秀堯、後橋口今彦兼柄の撰。惣冊41本。
309	三峽庵談話	橋口善兵衛龜隱、木村探元の話を開書したもの。

D. 寺社の部

	史料名	著者・史料の内容・異称など
310	石屋和尚行実	永享6年3月、竹居和尚の法嗣為幡の撰。
311	石屋禪師塔銘	永享6年、南禅寺惟省和尚の撰。竹居正猷建けると也。
312	竹居禪師塔銘	南禅寺天隱和尚の撰。長久2年9月9日法曾嗣東純建てる。
313	仲翁和尚行状記	福昌寺嶺室和尚より竜澤和尚に答えられし書。
314	福昌寺奉加帳	永享10年と巻末に見えるも、尚天公の御名を載れば以上よりの奉加なる事知べし。
315	真俗二諦常住記	大興寺開祖頼政上人の著。頼政は酒匂紀伊守二男、始め一乗院住持。大岳公の時、一乗院頼政筆記とも。
316	吉祥寺四世覚書	
317	運管上人覚書	運管は加治木本誓寺の開祖、寛永3年正月遷化。
318	松岳和尚日帳	一冊に松岳は加治木吉祥寺の開山。
319	願成寺千林仏寄進衆	帖佐にあり。
320	彦山由緒	
321	諏訪稻荷御神事由緒	文化5年、史官の撰。
322	水鏡由来記	
323	清水山王社由緒	
324	寺院由緒	寺社方にあり。
325	寺院古棟札集	寺社方にあり。
326	大興寺由来記	
327	大乘院過去帳	19冊。この寺に葬れる人のみにあらず。
328	福昌寺住職系図	
329	長禪寺(善)戦亡帳	飯野の寺。
330	浄福寺過去帳	加世田にあり。
331	福昌寺戦亡帳	登蓮録ともいう。
332	浄光明寺古過去帳	高城の寺。天文9年4月弓筋以来同11年8月迄の戦亡の人。(東大本では高称寺過去帳に付く。)
333	鹿兒島寺社廻	
334	日新寺戦亡帳	
335	天昌寺戦亡帳	佐土原の寺。島津中務豊久に従い朝鮮・関ヶ原・莊内等にて戦没者の法名・姓名。
336	三箇国始神社考	
337	青龍権現記	
338	華尾山縁起	寛政元年10月、山本正誼の撰。
339	法華嶽寺縁起	天明8年、山本正誼、住持毘山に代って撰。
340	法華嶽寺古縁起	
341	住吉社御奉納和歌集	末吉。
342	神社考	本田下総守親盈の著。
344	日隅御巡詣神社記	本田下総守親盈の著。
344	山之口地蔵記	
345	盲僧三徳咄覚	加久藤地神家督なり。
346	御兵具所稻荷縁起	
347	福昌寺疏双紙	
348	天海和尚自記	福昌寺の住持。大中公の葬礼の事ども見える。

349	仏生寺由来記	蒲生の旧記ともいべき書。貞享元年8月23日赤塚源左衛門真勝の記。仏生寺は蒲生の祈願所。
350	神代三陵考	白尾国柱の著。
351	神社伝記	大河平喜左衛門隆棟の著。

E. 雅藻之部 (教誡・秘訣之書、また此の附録)

	史料名	著者・史料の内容・異称など
352	烏陰漁唱	桂庵和尚の著。
353	烏陰雑著	桂庵和尚の著。
354	乱道集	巢松老人の著。巢松以安詩集とも題す。桂庵と同時代の禪僧。
355	南甫文集	文之玄昌の著。
355	南甫文集遺編	
357	日新公以呂波歌	
358	龍伯公御詠歌集	
359	龍伯公以呂波歌	
360	黄門公難波津歌	
361	泰清公御詠草	諏訪兼利の諷評あり。
362	泰公遺事	肥後平藏盛賛の撰。
363	大玄公修徳要術	
364	大玄公賜花岡公子御誠書	
365	浄国公御屏風画之賛	侍臣岩切治房・原田経兵、命を請け写し置くもの。
366	大玄公七十御賀歌集	
367	古之遺愛	肥後盛賛の著。
368	溪山公亀鶴問答	
369	溪山公以呂波歌	
370	如竹翁伝	室生鳩巢文集の抄。
371	寺社巡見記	牧仲左衛門胤昌の著。和歌なり。
372	序纂文集	諏訪兼利の著。
373	員外千首和歌集	諏訪兼利の著。
374	中村閑居記	諏訪兼利の著。
375	忍艸	飛鳥川記とも題す。泰清公遺体高野山登山にお供した諏訪仲左衛門兼時の道中記。
376	浮艸之露	2巻あり。上原久貞妻昭志の著。□□鏡州訂正。
377	梅華百詠	相良清兵衛長英の詩。
378	菊華百詠	
379	菊地東匂文集	
380	和南文集	5冊。畠山義方の著。
381	北郷久嘉自記	
382	東郷重位以呂波歌	示現流伝書。
383	柏原幽静以呂波歌	名は公英、市右衛門と称す。示現流を善くす。
384	醒眠集	柏原幽静公英の著。
385	平田可竹遺誠集	伊東五右衛門に贈ったもの。
386	一鉢集閑書	砲術伝書。和田乗助正張の著。
387	西海拾玉集	二宮甚内編集。本藩名士の和歌。
388	児玉図南伝	播州衛生河口三八子深の撰
389	南堂先生賀詩文	山本正誼以下洋官儒生の作。
390	日洲先生詩集	山田嘉三衛門君豹の著。
391	蘭臯先生詩稿	吉田用右衛門清純の著。

392	柁城黒川記	島津久徴の記。
393	名山楼詩集	
394	海門遺稿	赤坂源助貞幹の著。
395	獨双紙	伊集院兼兵の撰。
396	桜島炎上記	命を奉じて山本正誼撰す。
397	桜島炎上記	興国寺亮洲和尚の著。
398	桜島炎上記	竹迫藤四郎の著。
399	桜島炎上記	印東孫市の著
400	男山物語	諏訪兼利以妻上(女?)上邸東都所著云。
401	琴蜂集	府市瀬戸山琴蜂の著。
402	駕籠墓地	今井八右衛門貞雄誦名珍重著。
403	麦藁笠	山沢禪枝の著。慈徳公高野山登山に供奉した時の道中記。
404	都巡	山沢禪枝の著。
405	三虚蔵道之記	山沢禪枝の著。
406	花屋帳	山沢禪枝の著。
407	虎狩	高柳好左衛門行文の著。
408	狐狩	
409	古之風	赤坂貞幹の著。
410	浮玉草	赤坂貞幹の著。
411	深恵	赤坂貞幹の著。
412	旅行記	谷山角太輔純香、齊宣公に従い江戸からの道中に記したもの。
413	劍法内侍所	天真流伝書。川上八次郎親持と門人吉井金九郎友傳の問答の書。
414	田代翁記	門人毛利治右衛門の著。
415	西藩四戦記	上原善蔵の著。
416	川上忠実碑文	垂水儒臣乾冠太の著。
417	長寿院盛淳碑文	大乘院11世覚山の著。大興寺に建立。
418	島津久通祖先碑銘	弘文院学士林大学守の撰。延宝6年、島津図書久胤、宗功寺に建立。
419	松浦示現流系図	
420	松浦書簡集	高弟崎元照雲に与える書。
421	島津久貫誠其子書	
422	御家世譜歌	福昌寺自巖和尚の書。

423	惟新公御事記	(※これ、72と73の間に入る。)
424	成形岡説	白尾国柱の著 (※これ、302と303の間に入る。)
425	東翁記	門人毛利治右衛門の著 (※これ、414と415の間に入る。)

426	文明六年三州豪族記	(※これ、東大本にあり(58と59の間なり)。松方本なし。)
127	黄套日記	(※これ、東大本にあり(61と62の間なり)。松方本なし。)
428	阿多若狭入道自記	(※これ、東大本にあり(111と112の間なり)。松方本なし。)
429	伊勢兵庫貞顕覚書	(※これ、東大本にあり(127と128の間なり)。松方本なし。)
430	木崎原類注文	(※これ、東大本にあり(278と279の間なり)。松方本なし。)
431	高称寺過去帳	(※これ、東大本にあり(331と332の間なり)。松方本なし。これに付注の記事「高城ノ寺、天文九年四月廿二日弓箭以来同十一年八月廿日戦死人数」は松方本では浄光明寺古過去帳に付く。)